

はじめに

哲学のイメージを前にひるまない

本書では、「哲学で抵抗する」ことについて考えていきます。

とはいっても、「哲学って何?」「抵抗って何?」というところからはつきりさせてほしいという人もいるでしょう。

抵抗についてはあらためてお話しするとして、哲学について考えるところからとりあえずは始めましょう。

ただし、哲学とは何かという問いへの私なりの回答は第一章できちんと示したいと思います。ここではまず、哲学が何ではないかについて、軽くお話ししてみます。

なぜそんな話をしなければならないのか? それは、ひるんでいたただきたくないからで

す。

あなたの頭のなかには、哲学というのは面倒くさくて陰気なものだというイメージがあらかじめあるかもしれません。実際、哲学は一筋縄ではいかないものだ、手間のかかるものだ、小難しい本をコツコツ読まないとわからないものだと言ってくるように見える言葉にも事欠きません。

たしかに、そういうイメージどおりの哲学がないわけではない。しかし、すべての哲学がそうだというわけでもありません。人を脅してくるようなものにまず従ってみなければ哲学はわからない、などということとは絶対にならない。

これこれがわからないとおまえには哲学がわかることはないだろうとか、哲学書を読むことはないだろうなどと脅してくるように見える偉そうな言葉からは、ためらわずに身を退いてかまいません。

またその反対に、だからこそ哲学なんか意味のない、くだらないものだと言ってくるような虚勢もあるでしょうが、そのような安易な態度からも、同じだけ慎重に距離を取りたいものです。

すべてが哲学に見えてくる経験

本書は一種の哲学入門、哲学へのお誘いとして読んでいただけます。

ところで、哲学入門の先には数々の哲学書が控えているのがふつうです。哲学入門を読んだら、その後は、いわゆる哲学書を少しでも読んでいくつうにしてくださいねというわけです。そのような考えかたは、入門書を書く側にも読む側にも疑われないことが多い。

しかし、私の考えはそれとは異なっています。哲学入門の先には、いわゆる哲学書を読むことが待っているのでは必ずしもない。

私たちの先には、言ってみれば、あらゆるものが哲学に見えてくるという奇妙な経験が待っている。もちろん、いわゆる哲学書もそのなかに含まれていてかまわないわけですが、べつに哲学書をもっぱら読む必要があるわけではない。

何を見ても哲学が見える、哲学に見える。本書で私が示したいと思っているのはそのよ
うな、世界のちよつと変わった見えかたです。

哲学は哲学史と同じものではない

さて、哲学は何ではないのでしょうか？

哲学とまぎらわしいものはたくさんありますが、ここでは三つだけ挙げます。

哲学は、哲学史と同じものではありません。これが第一点です。

哲学史というのは、連続と続く、いわゆる哲学者たちの営みを語っていく歴史のことで、実際には、哲学が哲学史をなぞることと学ばれることはしばしばあります。少なくとも大学ではそうです。

なるほど、その学びかた自体が完全に間違っているとも思えません。私自身も、ある程度はそのようにして哲学を学んできました。

しかし、その学びかたからひるがえって、「哲学というのは哲学者という偉い人たちが次から次に精妙な珍説を提示する一連の物語だ」というような印象をもたれると困ります。

哲学者と呼ばれる著名な人々はたしかに哲学者であり、それも相当に偉大な哲学者ではある。それを否定しようというつもりはありません。彼らの難解な著作はいずれも精読に

値すると思いますし、かく言う私もいつも読んでいます。

しかし、彼らが今日に至るまで集団で形作っているらしい思想の連鎖を学ぶことと、哲学を学ぶことは、まったく違います。

少なくとも、学びのパッケージになっている哲学史は、哲学者と呼ばれる人たちの営みの正史にすぎません。正史というのは、政治的制度や文化的制度といったものが自らの来歴や正統性を保証するために組織する物語です。そのような制度によって、個々の哲学者たちもれつきとした哲学者として数えられていきます。

その歴史は虚偽を含んでいるばあいもある。あるいはまた、完全に虚偽ではないにしても、現行の制度を利するように、故意にせよ無意識的にせよ取捨選択や誇張、歪曲わいきよくが加えられていることもある。

私は、そのような物語が存在するということが自体を否定したり批判したりしたいわけではありません。そのような物語を読むことを通じて、いまある哲学という制度のありかたを肯定的にせよ否定的にせよ透かし見て学び取れることも少なくないでしょう。

ただ、その物語が哲学の純正な物語だとか、唯一の物語だとか考えることには、あまり

意味はなさそうです。そもそも、正史は時代とともに作り変えられていってしまうものでもある。

哲学史を通して自分なりに学べることはたくさんあるにしても、哲学史を哲学と混同しないということは本当に重要です。

哲学者というのは哲学をする人を指すわけですが、哲学史によって哲学者と認定された人以外にも、哲学者はたくさんいる。少なくとも私はそう考えています。

哲学の展開も、哲学史によって保証されている以外にもさまざまなかたがあります。そもそも、制度によって哲学者と認定されている人たちにしたところで、べつに正史の一部になるために哲学をしたわけではありません。つまり、正統と見なされる哲学なるものを引き継いで次世代に伝承するなどということのために哲学をしていたわけではない。

哲学者は襲名しない

なるほど、正確を期して言えば、哲学するということに一種の伝承という側面がないわけではありません。実際、「哲学する心」のようなものが師から弟子へと伝えられるとい

うことはありそうです。

その師弟関係は大学その他の制度によって養われることもあるでしょう。学問分野としての哲学は今日、主として大学で学ばれるものですが、その意味では、正史の学びに合わせて、大学はこの「哲学する心」のようなものを伝えていくのに恰好かつこうの制度となっているとも言えます。

また、哲学の師を本のなかにしかもたない弟子というのもいるでしょうが、そのばあいにもたしかに、何かが仮想的な師弟関係を通じて伝承されてはいます。

しかし、そのように何かが伝えられるとはいえ、哲学は本来、そのつど一代かぎりのものです。このことはいくら強調しても強調しすぎにはならないでしょう。

もちろん、過去や現在の他人が企てた「哲学」を参照する、ということも充分にありえます。実際にせよ仮想にせよ師がいることも多いでしょう。そうしてはいけないのだ、そのつどゼロから作らなければいけないのだ、などという杓子しゃくし定規な決まりが逆にあるわけでもない。

ただ、それをふまえてもなお、哲学という営みはやはりそのつど、他から完全に独立し

てなされるものです。他の人による「哲学」を参照するときでさえ、人は、その哲学にどれほど深く影響されようとも、その哲学を継いでいるわけではありません。

「哲学する」ということにおいては、かつてあったものを次の世代に伝えていくということが問題になっているわけではありません。

哲学者は襲名しない。二世哲学者、三世哲学者はいない。哲学している人たちはお互いにバラバラです。

独自性を示そうなどと色気を出さなくとも、哲学する人はおのずと、哲学することにおいて他から隔絶しています。しかし、それが遠目に見ると群れをなし、また時間軸上に並んでいるようにも見える。そのありさまを切り取り、何らかのしかたで整理して提示するのが哲学史であるというにすぎないでしょう。

正史に対して、スピノフやサイド・ストーリーや裏歴史もいろいろと考えることができます。また、そのような副次的な物語においてさえけっして語られない哲学や哲学者も枚挙にいとまがないはずで

詳しくは次章以降でお話ししようと思いますが、哲学というのは、気がついてみれば誰

にでもできてしまっているかもしれないものなのです。何かを継承しなければならない、何かのお墨付きを得なければできない、というものではない。

「哲学する心」のようなものさえ自分のなかにどこから飛び火してくれば、そこから先は誰でも自分で哲学してしまい、後はその火を自分で養っていくことになります。

その火は、実際にせよ仮想にせよ師から飛んでくるかもしれませんが、あるいは、個人的、社会的その他の途轍とてつもない状況が、突拍子もないタイミングで勝手にこちらに火花を飛ばしてきて、事実上の師となることもあるでしょう。また、日々を過ごしているうちにいつの間にか、気づかぬままに自分に哲学の火がついているということもありえないことではありません。

どのような経路にせよ、その「哲学する心」のようなものの火花が飛んでくるということがありさえすれば、誰にでも哲学はできる。あなたがいわゆる狭義の哲学者であるか否かは問題ではありません。

哲学というのはその意味で、一部の知的エリートに独占されている営みではなく、いわば、きわめて民主的な営み、知の庶民に対して開かれた自由な営みなのです。

哲学は高邁な理念を論ずる営みとはかぎらない

次に行きましよう。哲学とは、「高邁な理念を論じていなければならない営み」ではありません。これが第二点です。

日々の生活と縁遠いように思える高邁な理念を論じているもの、それが哲学だ、という印象があるかもしれません。世事から超然として、「真実とは？」とか「美とは？」とか、ああでもないこうでもないと考えているというような印象です。

諷刺ふうしされる哲学者のイメージがあるとすれば、それは、遠大なことを孤独に考え続けるあまり目の前のものが見えず、足元のバナナの皮で滑っているというようなものかもしれません。

たしかに、真実やら善やらを大きく問うことも哲学ではありません。しかし、それだけが哲学だというわけではない。

なるほど、古代から真・善・美といった高邁なテーマが哲学において問われてきたことは事実です。しかし、そもそも、真・善・美を問うた人があらかじめ哲学の対象を手にし

ていたわけではありません。

哲学者は、「よし、哲学するか」と思い立って、哲学のパレットから、哲学的なテーマであると保証済みの「善」という名の絵の具を選んで哲学の小綺麗こぎれいな絵を描くわけではない。善なるものを哲学的に問うたら、それ以降、善が哲学のテーマになった、というのが本当の順序でしょう。

絵の譬たとえ話を続けるなら、あなたがそのへんに転がっている泥を取りあげて絵を描いたことよって、その泥はそれ以降、哲学の絵の具だったことになるし、またそれ以降、その絵は哲学だったことになる、ということです。

世事から遠いもの、賢そうなもの、深遠そうなものなど、哲学らしさのイメージを形作っているものは、いずれもイメージにすぎません。

もちろん、ばあいによっては哲学にはそういう側面が見られることもあるでしょう。物事を突きつめて考えると、結局は、そのようなイメージをもつ何かに到達することも多いというのは事実です。

しかし、哲学はそれだけではないし、必ずしもそこからスタートするものでもない。

哲学は悩みでも悩みの解決でもない

哲学は深刻な悩みそのものではないし、ましてや悩みの解決でもない。これが第三点です。

哲学にはどうしても、「人生とは?」「幸福とは?」「正しいとは?」「死とは?」と、眉間に皺しわを寄せて考えるイメージがつきまといまゝです。さしずめ、オーギュスト・ロダンの『考える人』のイメージです。

もちろん、哲学するときに悩むことが多いのも事実でしょうが、深い悩みやつらさが哲学を基礎づけているわけではありません。苦虫を嚙かみつぶしたような顔を四六時中していなければならぬわけではない。軽々とした哲学、愉快的な哲学だって、あつてかまわない。なるほど、哲学と宗教には文化的に言つて近さがありません。図書館で本を探すとき、「日本十進分類法」というものを頼りにすることがあるでしょう。その「100番台」といえば「哲学・宗教」です。「日本十進分類法」の由来である「デューイ十進分類法」では、100番台が「哲学と心理学」、200番台が「宗教」ですが、やはり隣同士です。

本質的なこと、観念的なことをあれこれ突きつめて考えるという点では、哲学と宗教にはたしかに共通のところがある。

しかし、哲学は、生死を含む人の深い悩みに対して、救済や解放という解答を一方的に与えるものではありません。